富士吉田市上吉田宿における御師町の変遷に関する調査研究

ｈ００００７３　中畑　太吾
指導教員　石井　忠二郎

＜第１章、はじめに＞

１－１　研究目的

日本一高く、また山容の美しさにおいても世界有数とされる富士山。その北側には、古くから御師町として成り立ってきた富士吉田市がある。

中でも上吉田宿は南北直線道路を挟み両側町として構成されており、町の成立においても歴史的意義が高く、また遺構も多く残されている。

しかし、時代の変化とともにその面影も徐々に変わりつつあるのは事実であり、現在可能な最大限の町並の保存と維持に早急にとりかかることが必要とされる。

本研究では、その上吉田宿の中でも、古い遺構が最も多く残されている上宿を主に取り上げ、町の成立及び現在に至るまでの過程を明らかにし、景観復元することを目的とする。

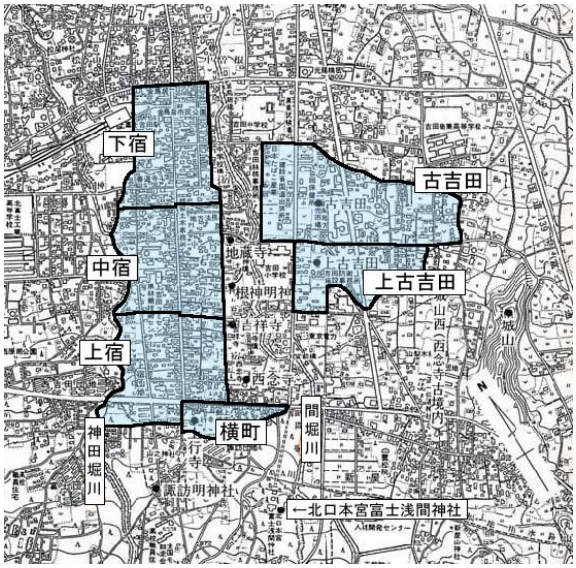

図１[レベル１]　上吉田宿の現状・小字図

１－２　研究方法

①富士吉田市上吉田宿に関する古写真や絵図類などの史料を収集し、それらを分析する。

②現存する御師住宅の配置図実測と、その清書。
上宿（田辺家、大雁丸家、小佐野家、槙田家、民宿筒屋、佐藤家、秋山家）中宿（藤井製作所、大国屋、中雁丸家、上文司屋、外川家）

③現在の上宿の敷地割による連続配置図を完成させ、歴史を追ってその特徴を把握する。

④明治初期の上吉田宿の町並を３DCAD により復元し、今後の富士吉田市について４段階の[レベル]にて検討する。

＜第２章、富士吉田市の歴史＞

２－１　富士吉田市の特徴

「浅間（あさま）の大神（おおかみ）」、「木花開耶姫（このはなさくやひめ）」を祀ってきた富士山信仰。そこには毎年各地からやってくる信者達の世話役をし、宿坊として生活をしていた御師と呼ばれる人々の存在があった。御師は信仰の指導から布教までしており、御師によって信仰が大きく支えられてきたということは明らかである。

２－２　史料による上吉田宿の主な過程

①元亀３年[1572 年]…雪代を避けるためなどの理由から、古吉田から現在の上宿・中宿に、東町・西町として移転。(図 1 参照) 東町は屋敷奥行きを揃えた計画的な町割と後背地の寺社の立地、西町は神田掘川を小字界とした自然形成的な形態となった。(図２参照)土地割は間口の大きい短冊型、そして屋敷構成は「前屋敷+本屋敷+裏地」の基本形が成立したと考えられる。(図４参照)

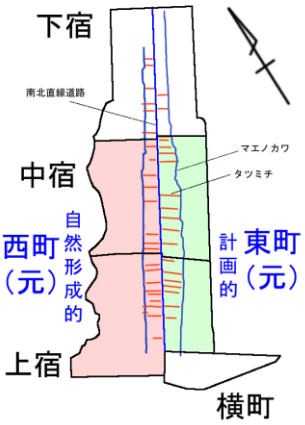

図２[レベル２]
上吉田宿の構成
（片側町から両側町へ）

②慶長５年[1600 年]…前屋敷の中に門屋敷の存在が確認される。本屋敷「本御師」と前屋敷（門屋敷）「町御師」の階層化が見られる。

③慶長 11 年[1606 年]…「東町・西町」という縦を軸に成立していた町が、下宿新設を画期として「上宿・中宿・下宿」という横を軸とした町割として成立、両側町となる。(図２参照)

＜第３章、近世以降における上吉田宿の変遷＞

３－１　上宿、中宿における町の変遷

実測及び史料調査の結果以下が明らかとなった。

現在における建物の位置関係の変化を知るため、上宿、中宿を取り上げ現状屋根伏図を完成させ、町のレベルにて考察を行った。

①骨格…建造物の建替は行われたが短冊型地割はほぼそのまま残っており、南北直線道路の位置や傾斜も変わった様子はない。

②タツミチ…上宿、中宿には比較的多くのタツミチが残存しており、南北直線道路から御師住宅主屋を見通せる。

③マエノカワ…補強や補修が加えられていた場所がやや見られたが、全体的な通り筋は変わっていない。従来の禊(みそぎ)といった使われ方はほとんど残っていない。(図３参照)

④建物全般…新旧の差が激しいが、上宿に向かうにつれて歴史的町並が色濃くなってくる。しかし痛みの激しい建物も多く見られ、最も貴重な遺構が建て替えの時期にかかっている。昔は奥にある屋敷の格式が高かったのに対し、近代以降は道路際の利便性が重視されるようになってきたと考えられる。

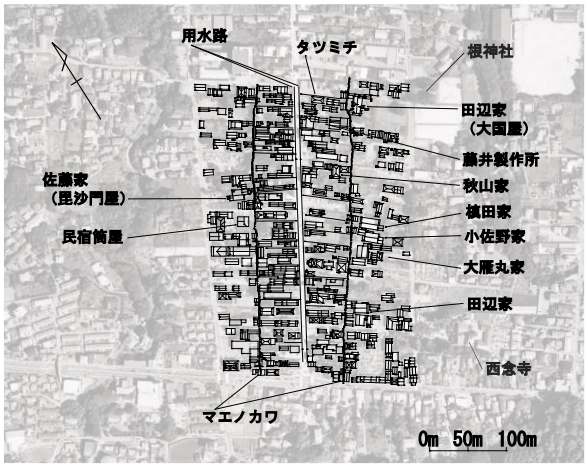

図３[レベル３]　上宿、中宿、現状屋根伏図

３－２　御師屋敷の構成の分析

御師の宿坊は大人数の信者を泊めるため非常に大規模で、タツミチやマエノカワを備えた特徴のある造りとなっている。タツミチとは御師屋敷へと導くための引込み路地であり、マエノカワとは主に禊場(みそぎば)として、大切に利用されてきた用水路である。(図４参照)

主な建物の構成例を挙げる。(図４参照)道路に面して奥行 30 間程度の前屋敷が並び、その間にタツミチを設けて入口には門が配置される。マエノカワを挟み、やはり奥行 30 間程度の本屋敷がある。本屋敷は元来表門と裏門で区画され、主屋・土蔵・中門などで構成された。裏門の奥には裏地があり、裏の水路を挟んで裏道に至ったことが小佐野家所蔵「家相図」と併せて読み取れる。

屋敷構成が成立したとされる慶応３年（1867）頃には、現在道路両脇にある用水路は中央に一本で流れており、道路は地割の延長で雛壇上、屋根も揃え、石垣のきれいな町並をしていたことがＦ・ベアトの古写真により伺われる。

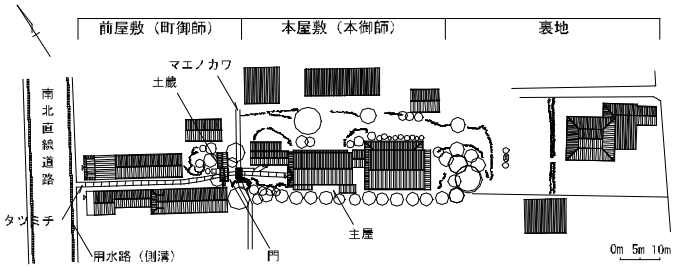

図４[レベル４]　外川家、現状配置図

＜第４章、富士吉田市の景観＞

４－１　明治初期の景観の復元

慶應３年(1867)Ｆ・ベアトの古写真と明治初期(1868～)世帯図より、江戸から明治にかけての上宿からの景観を復元した。(図５・図６参照)

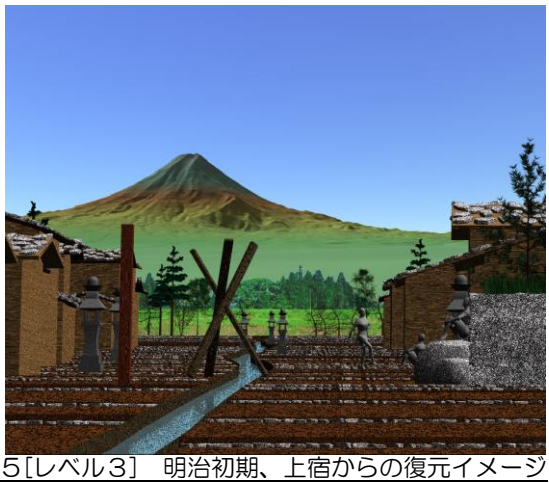

図５[レベル３]　明治初期、上宿からの復元イメージ

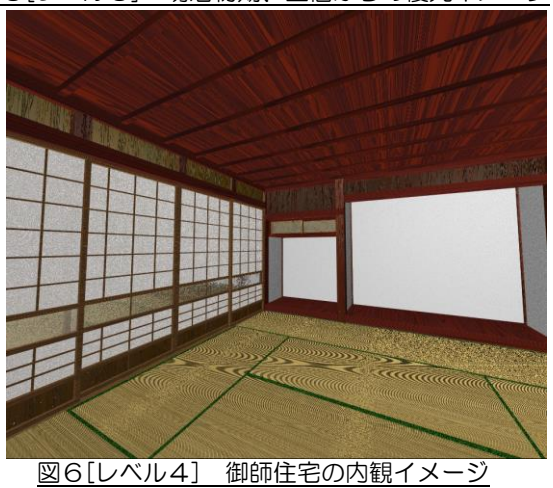

図６[レベル４]　御師住宅の内観イメージ

＜第５章、まとめ＞

本研究では現存する御師住宅の現状配置図、さらに航空写真・実測図を元に上宿・中宿の現状連続屋根伏図を完成させ、地形から建造物までの様々なレベルでの対象物で比較をした。現状を把握し、歴史的史料の多く残る明治初期の町との比較の結果、地形や地割といった地理的なものはほぼ変化が見られないにもかかわらず、建造物やその付属物に至っては近年建て替えが激化していることが確認された。

かつての風景を取り戻すためには、地理的な要素が残っているうちに建築物のレベルで町並の再現を開始する必要があり、それは今現在であることも判明した。幸いビルなどの巨大な建造物は建てられておらず、現段階での町並の復元は、住民の協力が加わることにより困難ではないと思われる。

本研究が町並再現の参考となり、それにより富士山の歴史的価値を高めることができれば幸いである。

尚、研究の指導をしていただいた伊藤洋子教授に深く感謝の意を表したい。

＜参考文献＞　　伊藤裕久「近世都市空間の原景」
PP-249-304　中央公論美術出版 2003